

2015 年度 東京SJCDテクニシャンミーティング

拝啓

陽春の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、来る7月5日に開催致しますテクニシャンミーティングにつきましてご連絡申し上げます。本年は現在若手セラミストで実力ナンバー1であろう湯浅直人先生をお招きし、セラミック築盛、製作方法や留意点などについてご講演いただく予定です。歯科医師と歯科技工士のコラボレーションをテーマに会員による症例発表とディスカッションを致したいと思っております。是非お付き合いの歯科医師、歯科技工士、また歯科衛生士をお誘い合わせのうえご参加頂けますようお願いいたします。

日時 2015年7月5日(日) 受付開始 9:30 / 開演 10:00~16:40

会場 お茶の水 ソラシティカンファレンスセンターRoom C (地図別紙参照)

参加費 東京SJC D会員無料

当日参加ビジター Dr 30,000円 DT 15,000円 DH・DA 9,000円

※SJCD 会員様は、入場の際QRコードを必ずご持参ください。

10:00 ~ 11:30(うちディスカッション 20分) Dr 山崎治 DT 小澤 達也

11:30 ~ 11:40 休憩

11:40 ~ 2:30 瀬田 寿先生 (うちディスカッション 10分)

12:30 ~ 13:30 昼食

13:30 ~ 15:00 湯浅直人先生 前半

15:00 ~ 15:20 休憩

15:20 ~ 16:20 湯浅直人先生 後半

16:20 ~ 16:30 質疑応答

-----16時30分閉会挨拶-----

山崎 治

1999 年日本歯科大学松戸

1999 年原宿デンタルオフィス

小澤 達也

1998 年 新東京歯科技工士学校卒業

1999 年 新東京歯科技工士学校専攻科卒業

2001 年 河津歯科医院勤務

2006 年 OLIVIER TRIC DENTAL LABORATORY (Oral design) 勤務

2009 年 原宿デンタルオフィス勤務

<演題：審美修復を成功に導くために必要な情報とその要件>

現在の歯科医療は、審美的要求の高まりや CAD/CAM に代表されるようにデジタル機器の進歩、材料の多様化に伴いオールセミックスを使用した修復の要望が高まっている。この要望の高まりとともにラボサイドにもより多くの情報が必要となる。補綴設計をする上でラボサイドに基本的な必要な情報として模型と口腔内、顔貌写真、患者からの要望等が挙げられるが、それぞれケース事の修復する範囲によってラボサイドにとって重要な情報は異なってくる。単冠であれば、正確な色情報、反対同名歯や隣在歯が明確な模型がより重要となり、修復範囲が大きくなるほど機能性と審美性の調和のとれたプロビジョナルレストレーションが装着されたスタディモデル、口唇や顔貌の情報がより重要となってくる。

そこで今回は、単冠からフルマウスまでどのような情報をもとに補綴設計をし製作していったか、それぞれの症例を通して解説したいと思う。

名前 瀬田寿樹
略歴 株式会社Vogue代表取締役
スイスCM社 公認インストラクター
スイスCM社 認定ラボ
ドイツWIELAND社 認定ラボ
東京SJCD会員
IPD JAPAN会長
東京歯科臨床研修会 会長
AOSメンバー
ITIメンバー

演題：永続性を考慮したキャストフレームDesign設計基準とその実際

抄録：RPD「リムーバルパーシャルデンチャー」の基本概念に基事いた構造設計のエビデンス及び欠損補綴における、インプラントをアンカーとする補綴術式が多様化している現在、IOD「インプラントオーバーデンチャー」も有力な術式と成っているが、臨床応用に際しては緻密な、診査、診断が重要と成り、補綴装置、残存歯部、インプラントアンカーの永続性を考えなければ成らない。すなわちアングルの分類に平行してケネディーの分類、アイヒナーの分類宮地の咬合三角、咀嚼ユニットなどの基準を採用しながら個々のにおける欠損が、どのような状態で起こり、どのように辿って来たのかと言う経過を踏まえた治療計画を立案する事が、鍵と成りプロビジョナルデンチャーでの観察を重ねて、最終補綴装置へと移行する事が重要と考える。又、ラボサイドにおいて、マスターモデル上、あるいは咬合器上では問題なく補綴装置製作を終えられたとしても口腔内における、力の作用を考えたとき、加圧因子と受圧条件との関係によって上顎骨に悪影響が及んで上顎総義歯が破折したり上顎骨に悪影響を及ぼしたりする懸念が有る。今回の講演では、以上のような認識を踏まえて臨んだ臨症例をお話ししたいと思います。

湯浅直人

略歴

2004年 東邦歯科医療専門学校専攻科卒業

2004年 医療法人社団新芽会近藤歯科勤務

2010年 医療法人社団徳洋会大谷歯科クリニック勤務

〈演題：前歯部セラミック修復における陶材築盛の理論と実践〉

歯牙形態の再現と密接な関係を持ち、前歯部セラミック修復物製作時に考慮しなければならない要件として天然歯様の色表現があげられるが、個々の天然歯に観察される個性的な色を、つねに異なる修復環境のもとで正確に模倣し表現することは容易ではない。隣接する天然歯が健全な色を呈する上顎単冠中切歯修復などでは、わずかな色の差が許容されない可能性が高まり、修復物製作の難易度も上がる。しかし、このような修復物の色表現において、インターナルステインを用いる手法には、色調和の確度を上げ、再製作のリスクを減らしてくれる点が数多くある。そこで今回は、同法の利点を最大限引き出し、高度な自然感を得る方法と、それに付随する修復物製作の理論を解説する。

また、色表現と同等に重要な、修復物の形態表現、表面性状・艶の調整、PCを用いた「天然歯 対 シェードガイド」「天然歯 対 修復物」の比色、についても解説したい。

